

屋外壁画制作の研究

—熊本地震復興制作—

松 永 拓 己

A study on outdoor mural painting work:

A revival work from the Kumamoto earthquake

Takumi Matsunaga

(Received September 29, 2017)

This paper is study on outdoor mural painting work.

In Kumamoto, the earthquake started in April, 2016 and many houses suffered a great deal of damage. The shopping center has also broken by suffering a calamity. There was a request of mural painting work from one store of them. The picture which makes a shopping center fine is expected. Then, I choose the sun as a motif with a fairy and Higo 6 flower, and give a mechanism picture. I draw a fairy as a symbol of a nature. I draw Higo 6 flower as a symbol of Kumamoto. I draw the sun as a fine source. Furthermore, I build a mechanism as an element which can play in a picture. I perform work together with three students of the Matsunaga laboratory. I drew the picture during July to August in about one month. An important element is the following three points in outdoor mural painting work.

– Does this suit a client's intention? – Does this suit this place? – Can this be made? I considered the work purpose, the work effect, and work feasibility carefully. I considered so that an excessive burden might not be placed on a work student in it. To take all the responsibility including completion work is needed. I inquire continuously.

Key words : Picture, Art, Mural painting, Kumamoto Earthquake, Fairy

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

2016年4月、熊本を2度の地震が襲う。県内各所で甚大な被害があり、多数の死傷者、家屋の倒壊、破損を被った。多くの熊本県民が被災した。

松永は2016年5月に壁画制作の依頼を受ける。

これまでも様々な壁画制作の依頼を受け、その都度制作手法と内容について依頼に応じ適切なものを考察し実践してきた。

絵を描くことによる貢献を実践する。

今回の制作内容を、熊本の復興を願うものとする検討をした。

1-2 本研究の位置づけ

これまでの制作研究を基に、熊本地震からの復興をイメージする芸術性の高い内容と技巧を織り込んだものを描く計画で、高度な技術を持つ学生のみを参加さ

せ、長時間制作を行うことを検討する。

内容について、基本原案を考案した。それは妖精と花と太陽である。花は熊本の象徴的な花である肥後六花をモチーフとして選ぶ。

本稿では、依頼を受けた壁面2面のうち、主に松永が原画を作成した妖精と肥後六花と太陽の壁画について制作考察・実践について述べる。

2 壁画内容について

本制作において、3つのモチーフと1つの仕掛け絵を考える。

妖精と花と太陽から画面を構成し、画面に仕掛け遊びをつくり楽しめる壁画とすることとした。屋外壁画内容については、パブリックなものとなるので、場に似合うものを考える。依頼者からの要望を汲み震災復興のメッセージ性を含むものを考える。妖精は自然界の見えないものの象徴として、花は肥後六花で熊本を象徴し、太陽は元気を象徴し、仕掛け絵は壁面に親しみを込めての案出である。

2-1 妖精を考える

自然は人知を超えてくる。時に突然の不幸を齎してしまう。自然の破壊的な力の大きさを感じる。しかしながら、同じ自然にありながら人に憩いを与える存在もある。人を慰め、癒しうる自然の存在を描く主題とした。それには精霊を取り上げ、中でも可愛げを持つ妖精を選んだ。近代科学技術万能の社会においては、世界を観ることは目に映る事実を信じることであろう。見えているものごとが真実と考える。しかしながら、今日、芸術は世界を表現するに主観や感性を許されるので、本主題である存在不確かな妖精を美術面から考えてみる。

妖精とは何であろうか。日本において妖精という言葉が訳され定着したのは大正4年になる¹⁾。西洋での不思議な精霊であるフェアリー (fairy) は日本の民間伝承である妖怪とは若干違うようである。妖怪のような異様感は伴わず、可愛いマスコット (mascot) のように親近感をすら感じさせる。民間伝承にいくつもの妖精が登場する。一般的には童話である『ピーターパン』 (Peter Pan)、『不思議の国のアリス』 (Alice in Wonderland) などの「お話し」として世界中にある種のイメージが存在している。よって、子供向けの可愛い存在として世界中でイメージを共有しているのではなかろうか。

妖精を嫌う人はまずいまい。妖精は架空であり創作上の存在であるはずだが、実際にそこに居るとしても迎え入れたくなる存在でなかろうか。一般に認識されている姿は世界中で読まれる物語『ピーターパン』に登場するティンカーベル (Tinker Bell) の容姿でないかと思う。手のひらに乗る位小さく、人の言葉で会話し、透明な昆虫の羽でひらりと飛び回る。時に思いやりがあり、時に悪戯好き、時に嫉妬すらする人間味ある存在である。

日本にも古来より多神教の文化を持ち、八百万の神が森羅万象にいることを許容できる歴史を持つ。「見えないもの」に畏怖し、姿を変えた精霊のような存在は、意識の中で自らの味方・仲間として期待すらする。(幽霊の存在とはここでは分離する)

西洋の妖精の面白いところは、可愛げである。前述のティンカーベルもそうであるが、昆虫の羽を持ち、宙に浮かび手のひらに乗るサイズ感が美しい。西洋にはギリシャ・ローマ時代から森羅万象に女神がおり、人間と関わる神話が存在する。それはニンフ (Nymph: 精霊) であり、大きさは人間と変わらず、人と様々に関わっている。例えば、画家のラファエロ (Raffaello Santi 1483~1520) はガラテア (Galatea) を描き、ボッティチェリ (Sandro Botticelli, 1445~1510) はクロリス (Chloris) を描く。作家であるシェイクスピア

(William Shakespeare 1564~1616) も精霊を文学に取り入れて物語る。近代においても、ターナー (Joseph Mallord William Turner 1775~1851)、グスタフ・モロー (Gusreautave Mo 1826~1898)、ルドン (Odilon Redon 1840~1916) 等、絵の中に美しい女性像を描き、それをニンフとし、物語を綴る画家は数多く存在する。それらは神話的世界の中にいるニンフとして描かれている。その影響は文学、美術、音楽など様々な芸術に作品となり、また、民間伝承の話としても継がれる存在として今日に至る。しかしながら、ニンフは自然の精霊である為、いかなる場面、状況、環境においても美しく登場する。

アニマ (anima: 氣息 靈魂 生命) の存在は様々な霊的存在の根源をなす。自然の様々なものに霊・生命が宿り密接に関わろうとする信仰になったのがイギリスの文化人類学者タイラー (Sir Edward Burnett Tylor 1832~1917) によるアニミズム (animism: 精霊信仰) である。このアニマは精霊であり、すべてのものに存在し、現在社会においても超自然現象には畏怖の気持ちと超現実的期待を求めていることもある。神に願う神頼みを行い、見えざる存在への愛着心がある。例えばマスコット (mascot) 等に幸運を願い生命を移入している。

「一人一人が心の中に、自分独自の妖精を住まわせているのだろう。妖精は自然の精霊だから、本来は形が無いはずだ。想像すればいいのである。」と井村君江 (英文学者) は論じる。井村は『妖精学大全』の中で妖精の姿・形を分析する。

妖精の容姿・大きさ

- ① 容姿・・・美しいものや身体に普通の人間にはないものがあつたり、人間と動物の混合や醜く恐ろしいものがある。
- ② 身体の大きさ・・・意のままに変身。怪物の大きさにも、小人にもなる。また、人間と等身大~昆虫の大きさと様々な大きさの妖精がいる。
- ③ 服装・・・毛むくじゃらで裸、自然物で体を包み保護色が多い。服の色は緑の上着がよく見られるが様々である。

妖精信仰はこれまで異教伝来・キリスト教伝来や合理主義の到来を経て、今なお作品の中で伝わり棲息し、多くの姿が描かれ続けている。

可愛げがあり心優しく悪戯好きで憎めない存在は自然の中から生まれた。人々の気持ちを癒す存在としての妖精のイメージを想像する。妖精は願えばどこにでも登場するという。

2-2 肥後六花について

肥後（熊本）において、武士の園芸といわれる名花があり、それを推奨したのは8代肥後藩主の細川重賢公（1721～1785）であったと伝えられる。重賢公は再春館（医学校）や蕃滋園（薬草園）をつくり、多くの草木・花木を写生帖に描いている。「花を育てる。」ことの難しさ、そして花を咲かせることの喜びを肥後の士族は誇りにしていた。肥後六花が登場する。

肥後六花は芯に秘訣があるという。花芯の素晴らしさ、花色の清廉さ、均整のとれた一重一文字咲きの花形を愛でるといふ熊本の文化である。

六花であるから6種類の花である。肥後芍薬、肥後花菖蒲、肥後菊、肥後朝顔、肥後椿、肥後山茶花である。一年を通じて美しい花を咲かせることに力を注ぐことが熊本の武士の心意気であったという。

< 肥後六花 説明 >

- ① 肥後芍薬は、大輪の1重咲きで各花卉は離れる。花芯は雄しべが雌しべを抱え込むように包みこんでいる。宝歴年間（1751～1764）、薬用として肥後蕃滋園に植えられた。寛政7年肥後藩士中瀬助之進が『芍薬花品評論』を著し完成させた。
- ② 肥後花菖蒲は、花は大きく、花芯が立ち、花色は紅・白・紺・紫などで純色が良い。鉢造りであることも特徴である。花が膨らみ花が落ちるまで座敷で鑑賞する。凜とまっすぐに立ち、花芯の形状を愛でることが鑑賞の楽しみである。江戸旗本松平定朝（1773～1856）は培養を重ねる。天保4年（1833）肥後藩士吉田可智（1786～1870）は秘訣を習い（『花菖培養録全』）肥後で花菖蒲を栽培したことが起源とされる。
- ③ 肥後菊は、江戸菊等と並んで中菊の類に属し、1重の花弁で、花色は紅・白・黄の原色である。特徴は、花壇作りにあり、大中小菊を3列に植え込み花壇の調和が見どころであり意味深い。菊は古くから栽培され鎌倉末期には皇室の紋章に制定されている。肥後菊は宝歴年間（1751～1764）に藩主細川重賢の文化政策として始められたと伝えられている。その後文政2年（1819）肥後藩士秀島七右衛門が栽培法を『養菊指南車』と名付け著述している。
- ④ 肥後朝顔は、小鉢本蔓作り（行儀づくり）で一輪の花を咲かせる。この花様は、蔓を鉢の高さの3～4倍にとどめ、花を草丈の4分の1の高さに咲かせる。鉢と草丈、大輪一花の高さを備える調和の美を成すものである。一般的に朝顔の開花は午前2時頃からはじまり4・5時には開花し、数時間でしぼむ。朝顔は古くから愛好されているが、古くは「古今集」に登場し、江戸期に栽

培が流行したものである。

- ⑤ 肥後椿は、美しさと清楚さを備える。花卉は一重5、6枚で大きく広がる花芯を持つ。古くは文政2年（1829）に『江戸白金植木屋文助筆記』に記録が残る。12代藩主細川斉護（1826～1860）の時代に花蓮（花愛好家）が誕生し多くの品種が作られている。
- ⑥ 肥後山茶花は、花卉数は1重咲きで5～10枚、八重咲きで30～50枚で紅・紫紅・濃紅・淡紅・桃・紅ほかし・白の花色であり、大きいものは15センチ程である。細川重賢藩主により宝暦6年（1758）に蕃滋園において栽培された記録がある。もともとは薬種であったがやがて鑑賞用となる。

肥後六花は熊本において、広く深く愛され定着しており、上品な美しさと熊本の象徴的存在として今日まで続く。各季節ごとに花が入れ替わり、愛でることが出来、花様と育てることの美が愛好されている。

2-3 太陽を描くこととは

太陽は、人間にとって欠くことのできない存在であり、日々頭上に存在し力を降り注ぐ存在である。古代よりエジプトでの太陽神ラーや、ギリシャ神話アポロ、メキシコの太陽の神殿等々、世界中で崇拜対象として篤く崇められてきた。日本においても太陽は天照大神の神話として、また民間伝承におけるお天道様として、日輪への敬意としていきづく存在である。ゲシュタルト的にも、幾何形体が画面に大きく入ることは形態にアクセントを齎し、太陽色として穏やかな赤系色をいれることは、画面要素としても有効である。メッセージとしては復興のシンボル、そして元気の源として太陽のモチーフを選択した。

2-4 仕掛け絵について

描かれた絵の中に、違和感を感じるものがある。その違和感は知的に遊ぶことが出来る。絵を趣がある鑑賞物として終わらせず、鑑賞者の錯視として楽しませる操作を施す。これはエッシャー（Maurits Cornelis Escher, 1898～1972）の騙し絵など有名であるが、様々なウイットや感動を持って視覚的混乱の中で工夫がなされている。

今回制作する壁画においては、この視覚的違和感を楽しむ絵とした。妖精の羽だけを描き、誰でもこの絵の中で妖精になれるポイントを設定した。

3 壁画制作構想

熊本は2016年4月14日夜と16日未明の地震により被災した。その中で、熊本の中心地である下通り商店街も多くのビルが壊れ商業の中心地が大きなダメージを受けた。そのひとつに帯屋がある。下通りの繁華街中心付近に位置し創業150年の熊本の老舗である。この店舗より、被災したビルのシャッター2面に壁画を描いて欲しいとの依頼があり、制作にかかる。絵柄について指定はないが、被災した街中を元気にして欲しいとの要望である。その依頼に基づき原画を考案する。熊本復興の願いと希望を感じさせる絵柄を考える。

1面は肥後六花に舞う妖精をモチーフとして背景に朝日が昇る絵柄を作成した。松永の私制作において、花と蜂をモチーフとしているが、その原案に則り、神秘的で希望のあふれる美しい妖精が花に舞う姿を描くことで、人々の心を癒し、遠景には太陽が昇る様子を描き、力を与える日輪の上昇イメージを添えた。巨大な花々と舞う妖精と朝日により復興を象徴する世界観を表した。花は肥後六花以外に百合の花をモチーフとして入れ、画面上での花の形状に変化をつけ、肥後菊については妖精の帯の模様として入れ、画面構成の変化をつけた。妖精は2体描き、さらに地面より1.4mの高さに妖精の羽だけを描く。そこに立てば妖精の疑似体験ができ、壁画の中に登場できる仕掛けの場をつくり、この壁画を装飾としてだけでなく、遊べる美しい仕掛け絵とした。描画の絵具については、街中であり人通りが多いことを考慮し、また、アーケード内であり退色浸食は軽減されることを考え扱いやすい水性塗料を選択した。壁面は金属シャッターであり、錆が気掛りである。しっかり磨き上げ、磨くことで描画絵の具の食いつきを高め、下地を塗らないで直接絵の具で描く手法を取る。

現場制作は依頼者の希望により、2面のうち残る1面に大学生作成の原画で花の孔雀画を大学生自身が描く。制作期間は自由とのことであり、1ヶ月間を設定した。週末の休日や大学の授業と重ならない時間帯を壁画制作に当てゼミ学生の負担にならないように設定した。制作は上質な完成度を考慮し制作能力の高い3名の松永研究室在籍のゼミ大学院生を選抜した。ボランティア制作である。

4. 壁画制作実践

制作者

菊岡由紀（熊本大学教育学研究科修士1年）、池畑緑（熊本大学教育学研究科修士1年）、山崎桃子（熊

本大学教育学研究科修士1年）。指導者にて松永拓己参加。

制作日程

5月末・・・依頼を受ける。現場視察。現状確認と構想を探る。ただし時期は未定。店舗建物の安全性および、シャッターの修理計画によりシャッター壁画の制作時期を計画する。

6月～・・・原画制作開始。材料試案。塗料業者と検討。
7月9日・・・最終原画採用。制作日程決定。

【原画1】（下通側壁面：横301.3×縦558.3cm）
松永作成

（図1）原画1「肥後六花と妖精と太陽」



図1 原画1「肥後六花と妖精と太陽」

【原画2】（城見町側壁面：横 3013×縦 561.0cm）
菊岡作成（壁画制作参加学生）

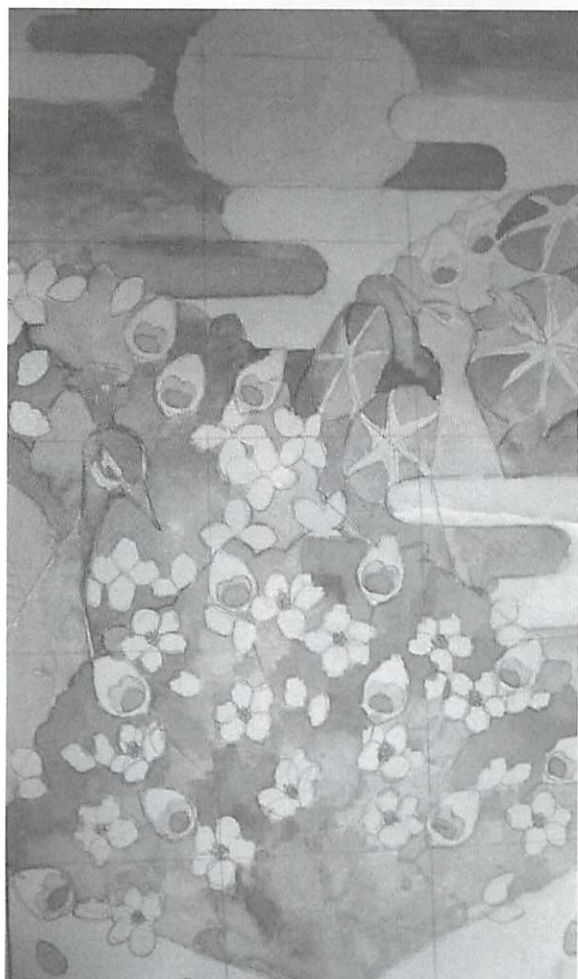


図2 原画2「花孔雀」

7月29日（金）より制作開始。1か月間におよぶ制作予定である。

7月29日（金）10：30～14：00 シャッター磨き。翌朝に業者による洗浄。

7月30日（土）13：00～16：30 糸貼りによる転写用グリット作成。チョークによる下絵。青塗料による輪郭線描き。

8月11日（木）、12日（金）、13日（土）、20日（土）、21日（日）、26日（金）、27日（土）、壁面上側からの描写着彩。

8月28日（日）

表面にUVコーティング塗料塗布。制作終了。



図3 制作前シャッターの様子



図4 壁面掃除

たわしで丹念に磨く。粉が吹きあがるが、磨き上げ後に水洗浄が行われた。



図5 糸グリット引き

原画拡大のための目安線を糸でつくる。



図6 下絵描画

色彩を豊かにするために青色での輪郭線描とした。



図9 妖精描き



図7 着彩

塗料は乾燥が早い。大壁面であるので、素早い作業が求められる。一度に塗り込むと垂れが生じるので、何回かに分けて同色を塗り込むことで発色をよくする。



図10 途中段階の全景



図8 着彩

グラデーションを多用する。



図11 妖精羽 仕掛け絵部分

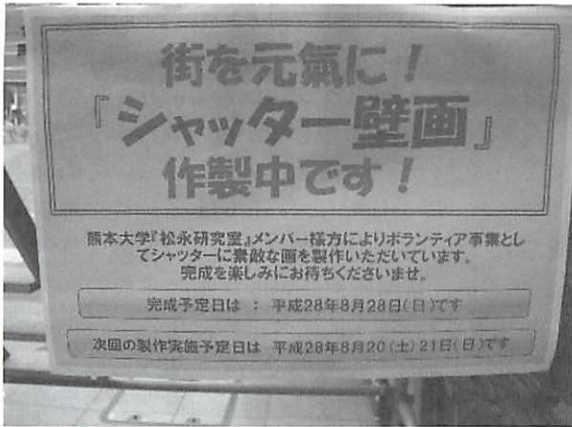


図12 制作現場掲示標



図15 壁画1「妖精と肥後六花と太陽」

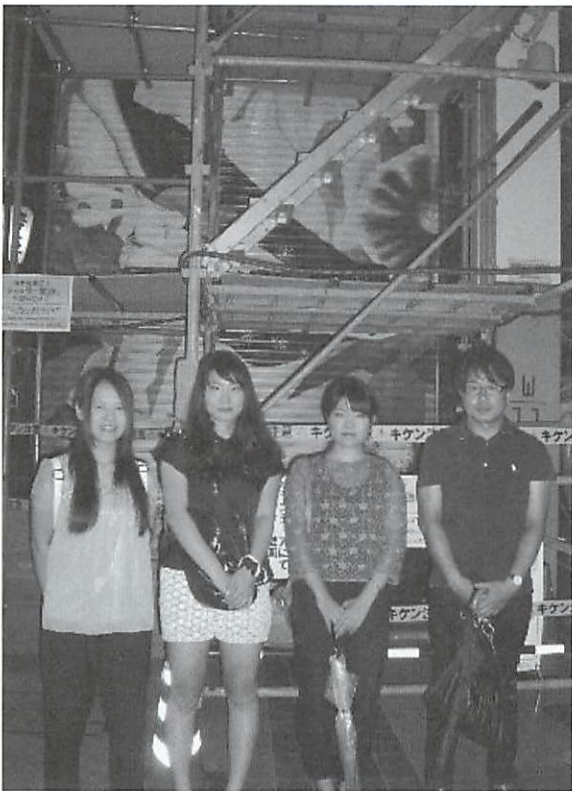


図13 制作終了
左から池畑, 山崎, 菊岡, 松永



図16 壁画2 学生原画制作壁画「花孔雀」
この作品は松永の指導のもと、依頼主の店舗の事業内容を考慮し、学生本人の芸術性を発揮して内容を考案し制作を行った作品である。制作技術は壁画1と同様の手順で行っている。



図14 完成 店舗全景

合計実制作日数は10日間である。制作中は終始依頼者も参加され応援がなされた。8月28日の完成後、終了を祝い、関係者、商工会、記者の方々と帯屋アーケード向かい側の料亭（紅蘭亭）2階を会場とした完成作品を正面で鑑賞しながらの祝賀会が執り行われた。なお、最終的に足場が撤去され作品が街中に完全披露されたのは10月末である。

5. まとめ

壁画を描くには要点がある。街中に常設される壁画制作について、考慮する点を3点取り上げる。

- ・依頼者の意向に合うか
- ・場に合うか
- ・制作可能か

依頼主は依頼する場合何らかの意向がある。その意向を汲む必要がある。資金を投じて絵を依頼するのであり、何らかのメッセージを抱いておられ、また、完成への思いもあらわれるはずである。それを打合せしながら伝えていただき、求められるレベルを学生が出来るか判断する。学生を含め誰かに過剰負担がかかること、齟齬をきたすことが起こるようであるならば受けるべきではないと考える。双方に迷惑かけることなく達成できるならば制作責任を持ち受ける。そのため段取りも、材料選びも、原画への責任、補償、保険、完成作品に対する責任も含めて判断し、責任者として制作を完遂する。本制作においては、震災に対する復興のメッセージ性が強く表れることが大切である。様々な描き方があるが、思案し、吟味し、モチーフ・構図・色合い・意味を考え実施に入った。何処にもない独創性があり、希望を形にしたものである。

屋外はそれぞれ場が備える空気感がある。広場に面していること、明るい場所が壁画に対し条件がよい場である。依頼者の希望テーマに答えながら場に似合う絵を描く。本作品は、熊本の中心商店街アーケード内で、大変好位置であり、目に留まる壁面の大きさでもあった。街中で多くの人が行き交いながら目にし、震災で壊れた街中に絵で元気づけたいという依頼者の希望を満たす壁画を描けた。絵柄に「妖精」と「花（肥後六花）」「太陽」を選び、参加型仕掛け絵作品が出来、熊本の復活の活力を象徴した絵は意味深く、最適なものとなったと思う。

制作学生は、これまで何度も壁画を描いてきた絵画研究室ゼミ生のみでの参加とし、高い技術を維持できる制作が可能であったので、原画にも凝ったものを準備した。

そして、制作は凡そ1カ月という長い時間を与えてもらい、制作費用・時間は十分であり、制作者の集中力を持続できる制作スケジュールであり、依頼主、街中の人々からの応援を戴きながらの制作あった事も良作に繋がっている。シャッター壁画についての確かな制作技術と、場を分析し求めに応える感性が本制作の意義であった。本制作は関係者の喜びを戴き終了した（テレビ報道、新聞報道、Web報道等多数のメディアにより報道される）。地域のためになることを念頭に魅力ある絵を制作したものである。更なる効果については継続して検討し、今後の地域貢献としての壁画制作の継続研究に繋ぐ。

謝辞

帯屋様をはじめ、関係者の皆様に対しまして制作へのご厚意に感謝いたします。

注

本稿は2017異文化交流国際学術研究会にて講演した内容を基にまとめたものである。

参考文献

- ・松永拓己（2011）「共同作業による絵画制作の実践1－熊本市旧産業文化会館壁画・附属病院壁画」『熊本大学教育学部第60号』。
- ・松永拓己（2014）「屋外壁画制作による地域貢献－阿蘇内牧にて－」『熊本大学教育学部紀要第63号』。
- ・松永拓己（2015）「屋外壁画制作による地域貢献2－教材化の可能性－」『熊本大学教育学部紀要第64号』。
- ・松永拓己（2016）「屋外壁画制作の研究－台湾での制作－」『熊本大学教育実践研究第33号』。
- ・松永拓己（2016）「屋外壁画制作の研究－附属特別支援学校における試み－」『熊本大学教育学部紀要第65号』。
- ・HW ジャンソン・アンソニー F ジャンソン（2001）『西洋美術の歴史』。創元社。
- ・山崎貞士・林茂行・粟屋強・吉田毅・林寛信・大藪重利（1986）『ふるさとシリーズ「肥後六花」』。熊本日日新聞社。
- ・井村君江（2008）『妖精学大全』。東京書籍株式会社。
- ・中山公男・高階秀爾（1980）『全集 美術のなかの裸婦4 神話・ニンフと妖精』。集英社。
- ・グザヴィエ・ド・ラングレ 黒江光彦 / 訳（1992）『新版 油彩画の技術－増補・アクリル画とビニル画』。美術出版社。
- ・C.ヘイズ 北村孝一 / 訳（1983）『絵の材料と技法』。マール社。